

# 山と博物館

第37巻 第8号 1992年8月25日

大町山岳博物館

## 長ネギの記憶

夏ははじめの、ある夜のことだった。

六十をいくつか越えていようか。

晩酌よりほんの少し入って、いつもより楽しげなおやじさんは「ホタルをとってやる」と、街はずれの小川にほど近い畦道の闇に消えていった。

五分も待ったろうか。

不意に闇から現われたおやじさんは「昔はこうして十匹も入れてきたもんだ」と、逆さにした長ネギの穂先を手渡してくれた。

ホタルが一匹だけ中にいることは、ネギが内側の一点から光を得て、エメラルドのようにぼんやり明滅していることで容易に判断できた。

これが私の知るホタルのあたりだろうか。これが私の知るネギの色だったろうか。

「それでもホタルはこんなニオイの中で平気なものかいね？」おやじさんはそれには答えず「ほれ見てみい」とニコニコする。逃げ出すでもなく、ホタルはネギの中で元気に光っている。

ネギとホタルとおやじさんに、こんな関係があったころを私は知らない。

はじめて見るそのあたりは、しかし今は存在しないつかしい闇からもれた光のように思えてならなかった。

(大町にて T・S)



ほたる 齊藤清 作板絵

# 北安曇郡小谷村中土

## 大宮諏訪神社の奴踊の歌

青木 治

### 一、はじめに

大宮諏訪神社は、信越国境に近い、姫川流域の小谷地方の古くからの惣社で、大町市、北安曇郡下、特に佐野坂以北にある有名な社である。この神社は、中土の中心、中谷にあり、鎮座地はすまの字宮の場と称する箇所、その地字から考えても相当の古さをもつ神社であることがわかる。古来から例祭日は諏訪大社の境外第一の摂社といわれる諏訪御射山穂屋の祭日と同日の旧七月二十七日であったが、現在は新暦八月二十七日に行われている。また、七年に一度ずつ行われる遷宮祭には、信越国境まで行つての薙鎌打の神事のあることでも名高い。祭典の神事催物としては、獅子舞と二人の童子による狂い拍子(一名九輪子)と本稿の主題である奴踊とがある。

### 二、奴踊

奴踊は、一年一二ヶ月にちなで定められた二人の奴で踊られる。この踊ることを振るといふ。奴は神輿の先導に立つて、先払いをする神霊警護の役者である。昔からの習慣で祭典の当日は、長崎・掘越・千沢・高地・田中・葛草連(昭和二十八年(一九五三)現在)



奴踊  
長崎の休所で勢揃い出発

昭和27年(1952)8月27日

カサノヨイ」と振り出して振り、振り揃う頃を見計らって、奴は長柄の槍を立てて身構え、神前に向かって大声で、「マオオス(申す)」という。このとき、奴は奴頭の身振りに倣い、腰の木刀に手をあて、腰をすえて、天の一角を睨んで四股を踏み、第一の奴歌、神徳を讃える歌を歌う。終わってまた振り直し、踏み直し、同

の各部落から出役するのが通例である。奴は各自、葦の翁頭巾を被り、背には梶の葉の大紋入りの揃いの印半纏に絞りの半帯を締め、同じ梶の葉紋入りの揃い前垂掛を掛け、木刀を一本づつ腰にたばさみ、顔には飾髭をつけ、赤脛には藁の太縄を結びつけ、白足袋に紙巻草鞋がけの服装である。その中の一人が奴頭となる。奴頭は鳥の羽を頭に、銀紙の短冊づきの槍の長柄を持ち、「ヨイトマカサノヨイ」と掛声勇ましく、身振り面白く揃って振り出す。

この奴踊は長崎部落の休所の家を出発、御輿の御旅所である太田家(昔からの旧家、現主は太田清輝氏)の前で、円い輪を作り、天空の一角を全員で仰ぎ、腰の物に手を掛け、四股を踏み、神徳を讃える歌を歌い、一回で終り出発をまつ。神輿の出発に際しては、行列に従って進むのであるが、途中沿道を振り振り進み、掛声もともと神社に入る。神社では獅子舞、狂拍子、奴踊の順番で、規則正しく神前の広庭で振るを例としている。

神社の広庭では、三回繰り返して踊るのを例とする。まず、奴頭の掛声で、「ヨイトマ

一動作を進め、第二の豊年祝の歌を歌う。更に振り直し、踏み直し、第三の時局に関する歌、社会諷刺の歌を歌って終る。

三、奴踊の歌について

この奴踊の歌は、昭和三〇年(一九五五)頃までに、一一三歌残されており、そのうち五六歌は一冊の帳面にまとめて記されている。一歌一歌の作歌年代の詳細は不明であるが、その整理書き写した年代については、宝暦(一七五五—一七六三)であるとの伝承がある。



御輿と獅子舞の獅子  
御旅所太田家の前 昭和27年8月27日

それは昭和二十八年現在小谷村中土、長崎の柴田松男氏(現在は松本市在住とのこと)の祖先高橋三郎兵衛が書き写したものだといふ(柴田寅吉氏談)。しかし、これは筆者考証の結果、宝暦より後れて文政年間(一八一八—一八二九)以後に書き写されたことがほぼ判明した。残りの五七歌は一頁ずつ、毎年祭礼の折に作歌し歌われ、そのまま端紙で年代順に重ねて綴じて保管されたらしい。極めて不用意、不完全な保管であったようである。毎年番号が付けられたのは明治二十七年(一八九四)以後であるが、全部端紙に記されていた。おそらく祭典のとき、読みながら歌ったものをそのまま綴ったものであろう。そこで当時北安曇郡誌民俗部門を担当していた筆者(当時大町南高校在職)は、同僚福沢武一氏(北安曇誌民俗部門方言担当)の応援を得、柴田氏より端紙の歌を借り整理、一覧化したのが北安曇誌(第五巻近現代の第五章祭と民俗芸能 大宮諏訪神社)の奴歌(一一二—一二六頁)である。

四、奴踊の歌の社会的考察

次に若干の歌を選んで考察する。

①松尾山 大明神のかいちうよく  
谷豊年とさけいわい  
松尾山道始めて作りたる時 文化一一年戌年

松尾山は中谷の奥、中谷川の最上流(松尾川)、文化一一年(一八一四)は甲戌である。山道の開通で森林資源の伐出しが可能となり、村中のお祝ごとである。谷豊年と酒で祝ったといっているが、この地方では、文化四年、六年、一〇年は大凶作の打ちつづいた年であり、文化一一年の春には、大町組松崎村(現大町市社松崎)の高橋佐五兵衛は、穀二百俵を小谷四ヶ庄(佐野坂以北)一ヶ村に出している。しかし、この年の祭典のときは、山道もでき、収穫の見通しもついたので、谷豊年と歌ったのであろう。

②さる年きたる作神は あつさぬるさの湯に入りて あとやさきやの花あそび 谷豊年の祝いかな

これは、あつ湯始年、又は大宮のごせんご下せんごにいたし、又はあとやさきやの出入り候とさうたなり

この申年は、壬申の文化九年(一八一二)と推定できる。あつ湯始年とあるのは、熱湯を始めた年の意味である。熱湯は小谷温泉の熱湯のことである。谷豊年と歌っているが、六年の凶作から三年も経過してのことであるから、谷豊年とも歌い得たであろう。そのとき熱湯が開かれ、湯の権利問題で元湯との間に紛争が生じ、訴訟問題にまで発展したので、村人の話題となり、好奇的関心から奴歌に取



祭列 御旅所(太田家)出発して 昭和27年8月27日

からの重圧、地主への羨望から、彼等を諷刺したのであらう。叱られたときの申し開きには、他意はない、ただ豊年を祝い、谷の繁昌を歌ったのであると申し開きをなして許されたという。当時の村人達の生活の窮状が思いやられる。以下は明治以降の戦争に関するものである。

⑤日本はひかりかがやく日の丸をおそれ 朝鮮・清国は台湾とられてちやんちゃんは今のはちの声

明治二八年日清戦争が終結し、朝鮮における日本の主導権、台湾の領有などで国民の得意の場面を歌ったものであらう。

⑥チャンチャン露助は馬鹿者よ 戦うごとに全滅で 光り輝く日の丸は 戦地は海陸受取りて 講和はすみて天下泰平

明治三八年(一九〇五)の祭典のときのも。日露戦争の戦勝に酔った国民感情がよく出ている。

③常法寺 かねのひびきで目がさめて 百姓やんこをぶっとしこは千国の寺せき所 きどをぶたれて止められて あとは千国のこめうよ

この歌は、騒動の歌、小谷村々千国まで百姓出候所を、寺とせき所とをうち留申候小谷騒動は文政八年(一八二五)。この歌は騒動の歌とある。文政八年のこの地方の騒動には、佐野坂を南に越した赤藁騒動と、千国道を北に出たものがある。前者は同年二月一四日に神城を出発し、一五日には大町・池田、一六日には、穂高・新田(豊科町)を経て飯田(豊科町高家区)で退散している。後者は一八日に起り、北に向っているが、この一隊は千国番所と北隣の常法寺の和尚におさえられ退散している。従って、この歌の作られたのは文政十一年(一八二八)か十二年のことと考えられる。恐らく騒動の始末処置が一応終り、藩役人から叱られない時期が来た頃を見計って、また奥の奥底に残っていた鬱憤を吐露したものであらう。

④太田も小田も 山田のいねもみりよく 横川かけて俵とるべし

この歌を歌った後で、奴達一同は太田家の庄屋の家に呼び出され、大変叱られたとの伝承がある。太田家・山田家・横川家・田原家(後)は、中谷村の村役人筋の家であり、大地主でもある。村人達は生活の苦しみ、租税

⑦事変にて 数多の勇士出征し 武運長久ここかしこ 祈願しますよ氏神へ 日華事変の勃発は昭和十二年七月七日であったから、八月二七日の祭典には、多くの兵隊の出征が次々と村々から出て、盛んに祈願に来ている。なお、満洲事変の当時には、戦争に関する作歌はない。

⑧昭和二〇年(一九四五) ばくだんで 戦災死傷九百万 仇とにらむぞ九千万 必ず打つぞ大和魂

この年八月一五降伏、二七日の祭典の際の奴歌である。まだ強い反撲心を示している。原子爆弾の惨禍も歌いこんでいる。

以下、郷土の事件や社会象の動きに関するものをまとめて載せ、村人達の生活態度や感情の動きをみることにする。

⑨明治三三年(一九〇〇) さらでも出来たる東橋 なんばん鉄のつり橋よ

二年がかりの二度つりて 奴はあきれてまればちよ

東橋は北小谷と中土に入る関門の橋、姫川に架けられた近代的な初めての橋で、村中こそって喜んだ様子がよく表現されている。交通不便な土地である上に、この地方の交通を遮断していた姫川への架橋であるから、その感情が特に強く表現されているのも無理がない。

⑩大正元年(一九一二) 年をまたがり大滴水 山橋とうにおし流し 原野田畑大ぬげよ 氏神様の御利益で

この地方は地すべりの常習地帯である。ぬけとは地すべりのことである。明治四四年(一五一一)八月八日午前一時頃、柳田山が崩落して浦川に押し出し、外沢区に衝突し、姫川を遮断して一大湖水を現出せしめ、翌年まで一ケ年間、舟三艘も浮んだという。年をまたがり大滴水」とその時の様子を歌っている。石坂では埋没四戸、行方不明二二人、牛馬の死二頭という惨害であった。それを崩落



奴踊 大宮諏訪神社庭 昭和27年8月27日

翌年の奴歌にしたのである。

⑪大正五年(一九一六)八月二七日 愈々蚤も高価にて 茶の間も寝床も金貨に銀貨 光の輝ぞくくくと 奴も紙幣で目をつくか 氏子息災風まつり

第一次世界大戦によるアメリカ景気は、日本の養蚕業を異常に発達せしめた。特に長野県の養蚕景気はすばらしかった。茶の間も寝室も住宅全体を蚕室にして、養蚕に励んだ村人達の養蚕景気が巧みに歌われている。

⑫昭和五年(一九三〇) 近年は 大さつ小さつのもなく

中谷村社の氏子ども 藪は安くて勇氣なし 世界的な不景気が大正の終りから昭和初年にかけてやってきた。特に蚤は致命的、それでも養蚕をしなければならぬ農村の運命。その不景気に直面した山村の状態がよく表現されており、村人達の沈滞振りもよくわかる。

⑬昭和三三年(一九四八) インフレは 益々あがる税金に 民苦しめて 闇の夜 明るき御代を神かけて 祈る心のせつなさを

終戦後の無秩序な世相を巧みに表現している。闇相場、インフレの進行、国民生活の苦しきなど余すところがない。

⑭昭和三〇年(一九五五) 押しよせる デフレにあえぎ百姓は とらぬ狸の皮算用 予約集荷で青田売り 御神酒の代を先払い 農山村の経済・政策に対する批判も誠に厳しい。

以上でとどめるが、その他神社の昇格、鳥居の建設、校庭の拡張、校舎の建設、道田橋の架橋、小谷温泉行バスの開通、村政、村の汚職事件など取り上げて巧みに奴歌にしている。これ等を一連に並べると、村のおよその歴史がわかる。

前北安曇郡誌編纂委員 現住所 穂高町有明五九六六

# 山と私の道具

佐久間 正治

生れつき虚弱の私を丈夫にしようと、山好きの伯父がよく連れ出してくれた。無理せず楽しくて、小学校卒業の時は山好きになっていった。

昭和二年YMCAに就職し、奇妙な先輩と働いた。寄宿舎には山岳部の大学生がおり、ザイルやピッケルに初めて触れ、山や探険の本はよく読んで山へは行けず、夜学への往復に足を鍛えるばかりだった。

その先輩は世界中を無銭旅行するのだと、暇さえあれば、スコットや白瀬探険隊のことを熱っぽく語りながら酷寒地向けの装備一切の手作りを楽しんでいた。旅へ出たら自衛上大切なことと話していた。昔の旅商人の道具のスケッチも見せてくれた。私は手伝いながら何時か自分も登山の装備を手作りしたいと考えていた。彼は道北の漁場とカニ工船で稼ぎ、カムチャツカからアラスカへと志し、或日ふつと旅立った。

私は登山がたくて退学転職した。夜行で発ち、夜行で朝帰りもよくした。こうなると「山キチ」で、町中の山の字に目が誘われるようになり、登山関係で生涯をと真剣に考えた。親は猛反対し、また悪いことに谷川岳の遭難多発が報じられた時で、喧嘩ごしで家を脱出したものだが、昭和六年元日に条件付きで許された。少年時代に山へ行かせた引け目もあり、母が厭な気分登って事故でもあったらと、父を説いたふしもある。条件とは、一

人で行くこと。二人では二倍、三人では三倍危険だとのこと。妙な理由ではある。だが一理あると、以来一人歩きを続けてきた。晴れての山登りは、頂上どころか天へも昇る喜びだった。

その年に冠松次郎氏の「黒部」を読み、下廊下廻行を実行した。鉞靴、ピッケル、ザイルの購入には苦勞し、お蔭で禁煙禁酒禁遊の一生になった。その前からテント、寝袋、リュック等コツコツ手作りしていた。登山経済学との珍語もできた不景気の時代である。大宮から白馬まで新宿廻りは速いが、高崎篠ノ井経由は遅い。しかし一銭だけ安くて、徳用寝台がある。座席の下が空いていて、長々と寝に眠り込める。新宿からだ先客も多い。篠ノ井駅前には美味しいソバと「ソバ粉のおやき」を食わせる店もある。そこで私は高崎廻りを選んだものだ。

下廊下へのルートは、宇奈月、唐松、白馬百貫山越えの他、白馬鍾ヶ岳から中背尾根下りの新ルートがあった。じきに廢道になったくらいで、ここを選んだのが大失敗だった。三〇kg近い荷を村宮小屋へ上げて、翌朝鐘の頂上下からの道を安心して尾根へ下りた。這松帯の切り開きで、根の下が雨で洗われ、網の上の様でフワフワと危険極まりない。しまったと思つた時は引き返しなからず、休む所もなく、ピッケルに布を巻き逆に出歩いて歩いた。七月末の炎天下、荷は重く、水も切れ、

汗も出なくなつた。春日俊吉氏の本に「水音の幻聴」が記されている。谷へ下りたい強い誘いと、限界に近い。二〇本のピトン、カメラ乾板、アイゼンを棄て荷を軽くした。次にテントポールやチョコレート、鯨節を残し、米、味噌も棄てた。意識が朦朧としながら、道から外れたら死ぬぞと自分に言い置きかして歩き、とうとうリュックを道に置いて逃げ、日が暮れて沢水にたどりついた。祖父谷の小屋番が親切にも粥を煮てくれ、翌朝リュックをとり出でてくれたが帰りは午後になった。近いと聞いたがえらく遠かつたところばされ、ひどく恥をかいた。二日も歩けぬ粗末小屋へ抜かれた。

この山行で重荷の疲勞、這松や藪くぐり、壁に吊した棧道のへつり等に、リュックの形がいかに危険をよぶか身にしてみた。その頃洋画の戦争もの「火の山」で、イタリーの山岳兵が木製フレーム付リュックで、岩登りやスキーをする姿を見た。身に密着して振られない。早速藤材で作成愛用した。戦災で焼け、戦後はビニール管で、次はまた藤材で小型を



手作りの山道具とともに

二つ作つた。

右脚負傷の身障者では、山道具の軽量化は必要だった。小屋泊りになったが、万一の時の必要品も含めて五・五kgを限度にしている。雨具上下一八〇g、固型燃料炊飯器二七〇g、湯沸し一二〇g、改良四ツ爪アイゼン一一〇g、三脚二二〇g、半切片目十倍双鏡二六〇gと軽い。コーヒーは四分、熱い味噌汁と飯が七、八分でできるのに急ぐ必要もない。服装も、暑さ凌ぎに半ズボンにもなるズボン、寒さには和紙チヨッキ九〇gは役に立つ。実用品軽量化は安全の一条件になる。

黒部の一件後、優れた南アの案内人と二回歩き、教えをうけた。杖と下りでの四ツ爪アイゼンの効用、また雨天での焚火についてだが、これは現在に必要ない。以来私は山行に杖と四ツ爪は必ず持つ。豊科警察署刊行の北ア遭難概況で、中高年者の増加を読んだ。杖さえ用いたら防げたと思えて、街でも使える登山杖を手作りした。疲勞は不注意と事故につながる。残念ながら外国人が主に求める。杖を嫌うのは日本の歴史に換る迷信である。ステッキには芸術的高級品がある。

現在山道具は軽量化で優れた品が多いが、まだ軽量化も考えられる。手作り同好の方々と交流し、楽しみたいと考えている。

(静岡市在住)

**山と博物館第37巻第8号**  
 一九九二年八月二十五日発行  
 発行所 千38長野県大町市 TEL 〇二一  
 大町 山岳博物館  
 印刷所 長野県大町市俵町 大希タイムス印刷部  
 定価 年額 一、三〇円(送料共(切手不可))  
 郵便振替口座番号(長野四)一三三九三